

## 翻訳者から読者へのメッセージ

翻訳者というと、ただ外国の本を日本語に翻訳するだけの人だと思っている方が多いかもしれない。もちろんそれが中心になるが、翻訳者にはもう1つ重要な仕事がある。「リーディング」だ。リーディングとは、原書を（主に刊行前に）読んだうえで、その内容をまとめて感想や意見を添えた資料を作成することである（この資料は「レジュメ」などと呼ばれる）。つまり、翻訳者は日本における1番目の読者であり、1番目のレビュアーでもあるわけだ。この資料を参考にして、その本が日本で刊行するに値するかどうかを出版社が検討する。したがって、レジュメづくりは非常に大切な作業だ。

とはいうものの、私などは修業が足りないので、読みながら睡魔と闘うこともあるし、たとえ面白い本であっても内容をまとめるのには大変に手間がかかる。率直に言って、個人的にはあまり得意な仕事ではない。ところがときどき、時間を忘れて読み進められ、レジュメもあつというまに書けてしまう本がある。この『LIFESPAN（ライフスパン）——老いなき世界』はまさしくそういう一冊だった。

今でも思い出す。リーディングを依頼されたのは、原書がアメリカで刊行されるより3か月ほど前。一気に読み切ったとき、「これはすごい本かもしれない」と思った。衝撃を受けた。すぐにもレジュメづくりに取りかかるべきところだが、内容を小ぎれいにまとめてしまうと読後のこの興奮が伝わらないような気がした。そこで、鼻息の荒いますすぐに担当の編集者に宛てて、異様に熱のこもった異常に長いメールを送りつけた。構成も何もなく、言葉遣いも気にせず、文面の見直しもそこそこに。この本の概要と、いかに「すごい」かを思いつくままに延々と並べ立てたのである（受け取る側からすれば迷惑な話だ）。

そのときは色々な褒め言葉を連ねたものの、今振り返ればとくに素晴らしいと感じたのは大きくって5つ。1つ目は、これが単なるハウツーものでも、よくありがちな健康本でもなく、老化の根本原因を解き明かす本であること。しかも、著者独自の統合理論をベースにしていることだ。老化研究と聞くと、一抹のうさん臭さや怪しさを感じる人もいるかもしれない。だが本書は違う。この道の権威とされるハーバード大学の現役の科学者が、なぜ生命は老化するのかという根本的な問いに真っ向から組み合った、じつにまっとうで本格的な科学書である。著者の理論については第1部で取り上げられ、しかも非常にわかりやすく解説されている。巻末の用語集も助けになる。（理論のみならず、第2部の前半では私たちが今できるアドバイスも提供してくれている。）

2つ目は、著者があくまで「若々しく健康なまま長く生きる」ことを目指している点だ。単なる「延命」ではない。この違いは大きい。過去100年で人類の寿命は延びたが、「生きるに値する人生が追加されたとはみなせない」と著者は指摘し、「ただ死なさずにおくだけのために人生をさらに何十年も長引かせるのは、道義的にあって許されることではない」

と言い切る。徹頭徹尾このスタンスが貫かれているところに、本書の価値と魅力がある。

3つ目は、次々と登場する最先端研究の数々だ。おもに第2部の後半がこれにあたるが、科学やテクノロジーはここまで来ているのかと、とにかく驚きの連続である。健康長寿効果のある分子の発見・開発、臓器の印刷、パンデミック回避のためのバイオモニタリング、山中伸弥教授の発見した遺伝子を用いた細胞のリプログラミング、さらにはそれを応用した若返りワクチンなど、SFとも思える世界を現実にするための研究が今まさに進められている。本書を通じて垣間見る近未来は途方もなく刺激的だ。

ここまででも十分に面白い。だが、さらなる感銘を受けたのは第3部であり、それが、本書をすごいと思った4つ目の理由になる。つまり、単なる科学書を超えたスケールの大きさと深さを備えているということだ。いささか恥ずかしいが、読後に私が編集者に送った超長文メールの一部を以下にそのまま抜粋する。

“ここで著者は、そのように寿命が延びた社会はどのようなものになるかを、じつに幅広い角度から、深く掘り下げていきます。人々が感じる数々の懸念や問題点を徹底的に洗い出し、それに対する解決策を提示する。社会保障、医療、経済、教育、労働、政治、消費、環境、人口増加、食糧問題。全方位です。

それに対する著者の提言には、目からウロコが落ちるといふか、自分のこれまでの物の見方を振り返らされるといふか、覆されるといふか。とにかく科学書を超えたインパクトをもっています。”

一科学者としては、ただ研究がどこまで進んでいるかを示すだけでいいという考えもあるかもしれない。しかし、自分の研究が社会に深甚な影響を与えるものであることを自覚し、また自負しているからこそ、その予想される結果に対して知らぬ存ぜぬを決め込むことが著者にはできなかった。著者が未来予想図を示したこと自体についても、予想の内容についても、賛否はあるだろう。でも、私にはこの部分が非常に意義ある考察だと感じられたし、少なくとも考えるための材料を山ほど提供してくれているのは確かだと思った。

原書が刊行されたのは2019年9月なので、コロナ禍の前である。だから第3部の内容についても、この通りにはいかない面がすでに多少は出てきているかもしれない。それでも、未来への大きな道筋を思い描くうえで、重要なヒントになるのは間違いないだろう。

ここでもう一度だけ拙メールの一部を引用したい。

“著者の描く未来通りの「長寿革命」が実際に起きたら、まさしく人類の歴史始まって以来のパラダイムシフトではないか、人類は本当にそこを目指すべきではないか、そんな気がしてきます。説得力があるんです。(中略)「病なき老い、老いなき未来」がどれほど素晴らしいものか、著者は渾身の力で描きます。そう、冷静な理論だけでなく、熱もあるんです。そこが本書にエネルギーを与えているように思います。”

この著者の溢れんばかりのエネルギーと情熱が、私の感じ入った5つ目の点だ。それがなかったら、先へと読ませる引力も読後の興奮も、ここまでではなかったかもしれない。老化を食い止めるための研究を「不自然」とする声に対しては、より良く生きようとする人間の欲求はすべて「自然」だと熱く説き、自分への批判を受け止めたうえで「それでも私は、私たち共通の未来への明るい希望を捨ててはいない」と断言する。この著者の楽観主義をどう捉えるかは読者しだいだ。私も初めは、「そんなに楽観していいのか」という気持ちどこかにあった。するとそのとき、次の一文に突き当たった。「未来を悲観するのは、現状が並外れて恵まれていることの裏返しである場合が多い」。確かに、少なくとも私は反射的に未来を悲観する癖がついていたかもしれない。その癖を抑えて、著者の楽観主義に乗ってみてもいいのではないかと、むしろそうすべきなのではないかと、いつしか気持ちが傾いていった。

後日改めて正式なレジュメを作成したときも、珍しく苦勞せずにさらさらと書けたのを覚えている。だが今思えば、あの超長文メールを担当編集者が迷惑がらずにすぐさま読み、ものの数分で「この感想を社内でも共有させていただきます」という返信をくださったあの瞬間こそが、日本語版『LIFESPAN (ライフスパン)』誕生への第一歩だった。この胸躍る稀有な一冊を1人でも多くの読者に手に取っていただき、あのとき私の感じた衝撃と興奮を味わっていただけることを願ってやまない。

2020年9月

翻訳者 梶山あゆみ